

テッド・ピーターズ「神学と科学 私たちは何処にいるのか」、より

(金城学院大学キリスト教文化研究所編

『宗教・科学・いのち 新しい対話の道を求めて』 新教出版社

2006年7月、52-101頁)

<内容>

「宗教と科学」というテーマをめぐる現代のキリスト教思想の概観・見取り図

<要点>

段落番号

- [1]「進化論と創造論との戦い」という「戦闘」メタファーは、神学的思考と自然科学との間の相互作用を正確に伝えない。
- [2]ひとつの革命、自然界の関する科学的議論の軌道内に神の問題を再配置すること。
- [3]別居モデル。科学と宗教は異なる言語を使用する。別々の知識のゲッター。
- [4]もうひとつの静かな革命家のグループ。科学者と神学者たちが共通理解のための共通の探求に取り組んでいる。新しい企て、《神学と自然科学》。
- [5]8つの異なる方法。学会の支配的見解 - 別居の見方による休戦、《二言語理論》。《仮説上の一致》。
- [6]新興の対話、重なり合う部分を最大限に活用。宇宙論、進化論、遺伝学。

1 科学と神学を結びつける八つの方法

「宗教と科学」の関係性をめぐる多様なモデルの概観

[7]様々な見方

1 科学万能主義

- [8]《科学万能主義》、《自然主義》《科学的唯物主義》、イデオロギー。唯一の实在、自然の实在が存在し、科学は自然に関する人間の知識を独占する。宗教は擬似知識。
- [9]ラッセル、ホイール。
- [10]ホーキング・セーガン。宇宙には絶対的な始まりはない。宇宙は時間的に自己充足的。「神の不在」

2 科学的帝国主義

- [11]《科学帝国主義》は神的存在を肯定するが、それについての知識は宗教的啓示ではなく、科学的探求によってもたらされる。デイヴィス。
- [12]ティブラー。神学は物理学の一部門たるべき。

3 教会の権威主義

[13]《教会の権威主義》、防衛的戦略。自然な理性に続いて神の啓示があって真理に至るという二段階の道。科学は神の啓示に基づく。第一回ヴァチカン公会議から第二回ヴァチカン公会議への変化。ヨハネ・パウロ二世。

4 科学的創造論

[14]《科学的創造論》、《創造科学》。その祖は原理主義（聖書の権威）。聖書の真実と科学の真実が同じ領域に属する。食い違う場合には、科学的理論に間違いがある。

[15]典型的な《科学的創造論》。

[16]体制側の科学者は《創造論》者を簡単に片付けようとする。グールド。科学軍の兵士。

5 二言語理論

[17]《二言語理論》、休戦を確立する唯一の道？ アインシュタイン、事実についての言語と価値についての言語。

[18]グールド、科学と宗教は異なった領域を占めており、対立しない。

[19]新正統主義の神学者、ギルキー。「いかに」と「なぜ」。バイリンガルな知識人。

[20]「二つの書物」論との比較。「二つの書物」はいずれも神を指示するが、二言語は、神か、自然かの異なる方向を指す。

[21]両派の共通理解の不可能性。すれ違いによる会話。

6 仮説上の一致

[22]《仮説上の一致》。「一致」とは、強い意味では「同意・調和」、弱い意味では「共通の探求領域の確認」。デイヴィス、今や共通の主題を分かち合っているのかもしれない。

[23]ワーキング、両立可能。ハイスターン、補完するような一致の形。

[24]「仮説上の」、主張をさらに精査すること、確認もしくは否認を受けることを求める。神学者と科学者の双方の側で、新しい何かを学ぶことに対する開放性が必要であること。ピッカート、不確実性と暫定性。

[25]エドワーズ、進化論的科学とキリスト教神学をひとつにしようという《仮説上の一致》を想定。進化論的科学は神が自然の中で目的を達成するために働く方法について現実的な知識を与える。両者を信奉すべきである。

[26]《仮説上の一致》モデルが自然科学とキリスト教神学との対話をリードすべきである。「世界が創造されたものであるなら、その創造者に言及することなくしては世界を十分に理解することができないと予期すべきでなのである」(68)

7 倫理的重複

[27]環境の危機、神学者も世俗的なモラリストも共に努力する。

[28]倫理的ヴィジョン（公正で持続可能な社会）は、行動への動機付けとして不可欠。未来思考。

[29]多くの神学者が創造論から倫理的ヴィジョン・言説の資源を求めてきたが、それ以上のもの、終末論が重要。

[30]終末論における再生の約束。到来する新しい世界秩序のヴィジョン。

8 ニューエイジの精神

[31]全体論。二元論の克服。

[32]カブラ、ボーム。分裂していない全体性。

[33]テイラー。

[34]ニューエイジの倫理学、エコロジカルな問題解決に相応しい行動へと動機づける未来のヴィジョンを提供しようとする。スウィム、ベリー。

[35]メタ宗教的な自然主義は、人為的。

[36]《仮説上的一致》によって、《二言語理論》を乗り越える。

2 科学と神学における信仰と理性

[37]一致のための洞察。科学的推論は信仰の要素（証明されていない根拠の想定）に依拠している、神学的推論は精査可能な仮説として再定式化されねばならない。批判的現実主義。

[38]ギルキー。独自の変装した仕方で、科学は、宗教的、神秘的である。世界が合理的で認知可能であること、真理は追究する価値があること。

[39]デイヴィス。科学に信仰の次元を認める。人間の推論についての「楽観主義的な見解」とその限界。「究極」の問題。

[40]クレイトン。神学は合理的議論と説明適切性という規範に訴えることを避け得ない。間主観的な批判の可能性。

[41]批判的現実主義。

《仮説上的一致》モデルに基づく関係性探求のための、手がかり（具体的な試み）
批判的現実主義、神学の仮説性、科学的な神学、形而上学、中核と補助仮説、
創造された共同創造者、自然神学。

3 批判的現実主義と神学的言及

[42]ハステーン。神学的また科学的言説すべてに言語の相対的、文脈的、隠喩的な次元を認める。隠喩やモデルの構築といった建設的な思考。神学理論は我々の実在を超えたはるかに偉大な実在に言及する。

[43]《批判的現実主義》（批判的実在論）／非直解主義（非実在論）／素朴実在論
イメージとイメージが指示する対象との間の文字通りの一致。
真理の対応説。

バーバー、ピーコック。真剣に受け取られても、文字通りにではない。神と人間の関係に言及する唯一の方法。

[44]マーフィー。批判的現実主義が近代主義のままに居続けようとしている点を批判。非根拠主義的な全体論、使用としての意味。研究計画。

4 仮説としての神学的主張：ヴォルフハルト・パネンベルク

[45]神の存在そのものが論争中の未解決の問題。間接的な検証の方法。ポPPER。言明はその含意によって検証可能。

[46]全体性という枠組みは未だ存在しない。それは予期されるだけ。神の实在が存在するのは、今のところ、有限の实在の全体性についての主観的な予期のなかだけ、仮説的要素を伴う。神学的主張を科学的にするのは、認識の仮説性、開放性である。

[47]意味の全体性の予期。その仮説の〈直接的確認〉はその終末論的全体性の実際の到来に依存する。我々の信仰は、我々の有限な实在の経験についての理解に提供する増大したわかりやすさによって、〈間接的確認〉を獲得できる仮説の形をとる。「神をすべてを決定する存在とする仮説を提起することそのものが、科学的専門分野を通して我々が研究する自然界に対する理解を増大するのであれば、積極的に評価できる」(80)

5 「科学と宗教」と「科学と神学」：トーマス・トランス

[48]トランス。神学の客観性。

[49]宗教は人間の意識および行動に関係する。神学は神に関係する。神学を科学（人間が神との関係を直接的に認知することについてのメタ科学）として定義。カール・バルトの影響。

[50]探求が研究対象によって導かれること。

[51]〈自然神学〉の再構築。アインシュタインの幾何学とパラレル。相対性理論におけるアインシュタインの革命は幾何学を物理学の物質的内容のなかに置く。

[52]〈自然神学〉を〈実定的神学〉のなかに置く。神についての実際の知識のうちに生まれる合理的構造の複合体。独立した地位を持たない。

[53]客観性は、科学と神学の両方を科学的にする。研究対象が自らを知らしめる過程。

[54]《無からの創造》、世界の偶然性。その秘密を解き明かすために直接に世界を研究すること。

[55]科学は神の創造についての人間の知識を拡大し、受肉と復活が起こった舞台についての知識を提供する。

[56]三位一体論を信じる。〈受肉した神〉という有限の客観的实在が神学の客観性の根拠となる。

[57]神学的循環の自己言及性であるから、首尾一貫性によって自らの立場を確立しようとするこの点で、神学が他の専門分野に比べて分が悪いというわけではない。

6 科学と組織神学：アーサー・ピーコック

[58]組織神学者たちのリーダーシップ。

[59]ピーコック。神学の課題は、科学によって提供された世界観からの宗教的概念化の見直し。

[60]この見直しは神に関する問いに至る。神は不思議だ。存在の不思議についての問い(20世紀の科学)。

[61]科学の観点から神学的概念を再検討。神は必然と偶然の究極の原因であり根拠である。

神は自らを制限する全知と全能(被造物の利益のために自己を制限するという神の行為)。神は愛である。苦しむ。
[62]動的で神的な生成。

7 ボトム・アップの体系学：ジョン・ポーキングホーン

[63]ポーキングホーン。ボトム・アップ方式。ボトム：自然界に関する科学的資料、イエスの伝記に関する歴史的資料、経綸的三位一体と遭遇する教会の三重の遭遇。
アップ：キリスト教信仰への根源的コミットメント、科学の分野で追求される真理と完全に互換性のあるコミットメントに関する高い次元の自信。
[64]信仰と理性はお互いに所属し合う。両者ともに真理の探究を反映する。
[65]〈一致〉に賛同。形而上学を通して。
[66]形而上学。二つの側面ともつ一元論。
[67]最初の時の端は可能であった。行動的か神を信じる人格神論者。行動的な神は全能であるが、暴君ではない。
[68]プロセス神学に対する批判。悪が克服される終末論的な保証がない。
[69]ビックバン物理学から生じた諸問題から派生。
[70]ポーキングホーン、ピーコック、バーバー。

8 物理学宇宙論と神の活動：ロバート・ジョン・ラッセル

[71]〈一致〉と〈不一致〉の弁証法を強調。進歩的な研究プログラム。
[72]ビックバン宇宙論とキリスト教の創造概念に見いだされる宇宙の起源の理解に関して〈一致〉を迫った。《二言語理論》の答えは否、半直解主義者の答えは然り。いずれにも不満。
[73]ラッセル自身の答え。内側の核となるコミットメント(無からの創造は、存在論的依存を意味。証明ではなく、部分的な確認)と外側の補助的仮説(必然的展開：存在論的依存 有限性 時間的有限性 過去の有限性)。
[74]有限性と境界性との区別。神への存在的依存は世界が有限であることを要求するが、必ずしも境界があるわけではない。量子論的生命。

9 創られた共同創造者：フィリップ・ヘフナー

[75]中核/補助の区別。補助的仮説の助けを借りて、それらが世界の解釈や経験的に信頼できる実りある世界における我々の経験の解釈に至るかどうかということ。
[76]『ザイゴン』、《創造された共同創造者》(中核に埋め込まれた基本的要素)、神の代理者の役割。
[77]イマゴ・デイ、未来への責任の倫理。

結論：創造物として宇宙を見る

[78]近代人にとっての自然、自然の啓示が明らかにするのは自然であって、神ではない。自然との自然な関係を超えて行かなければならない。
[79]世界の創造は神の継続する救済のドラマにおける必要な最初の行為。宇宙は贖いとい

う神のシナリオにおける役割を演じるために存在する。

[80]世界の創造を理解する前に、神的な意図をもった一人の神が存在するということを知る必要、仮説を立てる必要がある。自然をひとつの創造として考えるならば、神の目的について何らかの啓示に依存している自分たちを発見することになるだろう。

[81]自然神学における逆転の可能性。「神についての研究が、自然についての知識に何らかの貢献できるかどうかを問うことになりはしないだろうか」(101)。神が創造者であると知ることが、我々が生き、活動し、存在している世界こそが《創造》であることを知ること。

[82]二つの方法からひとつを選ぶ必要はない。同時に両方することも可能である。

<コメント>

- 1．類型論的な議論の整理の持つ問題性、個々の思想家の単純化。
- 2．《仮説上的一致》は楽観的な研究プログラムの印象、実際に成果を示さねば説得力がない。
- 3．倫理的な議論については、説得的である。